

生徒の内発的動機を
どう引き出せるのか？

探究活動において生徒が「自ら問いを立てる」には主体性と問題意識の育成が欠かせない。

多くの高校で探究活動が始まっている。

しかし、それらの高校すべてでうまくいっているわけではない。

一番の壁となっているのは、「生徒が自ら問いを立てる」ことだ。

この壁を乗り越えなければ、探究活動も単なる「調べ学習」に終わりがねない。

問いを立てるには何が必要なのか、どんな力を育成すべきなのか、先進的な事例を紹介しつつ考えていきたい。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野伸一郎

「与えられた問い」ではなく「自ら問いを立てる」のが探究活動

全国の高校で探究活動の導入が進んでいる。その理由は、学力の三要素が「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・協働性・多様性」として定義し直され、それに連動して探究活動の導入が求められるようになったからだ。

「習得・活用・探究」の三段階の学習が提示されているが、習得や活用では生徒は「与えられた問いを解く」のに対して、探究の特質は生徒自身が「問いを立てる」ということにある。

探究活動とは図1のように、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」をスパイラルに繰り返しながら、そのレベルを向上させていく学びである。

しかし、探究活動に取り組む多くの高校が壁にぶつかって

る。それはまず最初の課題の設定＝生徒が自ら問いを立てる、というところで躓いてしまっているからだ。

生徒が自ら問いを立てる。

こう書くのは簡単だが、実際に行うのはそれほど簡単ではない。教えられたことに忠実に従って、与えられた問いを解くのは別の「何か」が必要だからである。

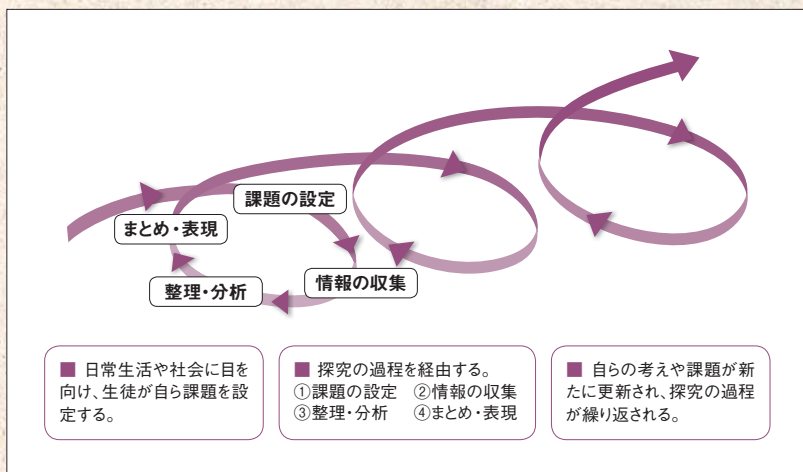
その「何か」とは、問題意識とも言い換えられる。問題意識をもっていなければ何を発見しても疑問を感じない。そして問題意識をもつということは、主体的であることと表裏一体でもある。

現在、文部科学省ではアクティブ・ラーニングと同義のものとして「主体的・対話的で深い学び」という言葉が用いられている。この場合の「主体的学び」とは「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につ

なげる」と説明されている。しかしこの主体的（主体性）は、ある意味では日本的な独自の概念とも言われ、心理学などではagency＝行為主体性がそれに当たるとい説もあるが、万人が認める英単語はないとされる。共通理解としては、「指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む力」、つまり課題を誰かから与えられて初めて動き出すのではなく、課題を発見して自ら解決に動き出す能力のことだといえるだろう。

とすると、生徒たちが主体的であるということは、生徒たちがそのことに取り組む内発的な動機をもつとい

図1 探究的な学習における生徒の学習の姿



出典：文部科学省「高等学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間」

うことでもある。「先生に言われたから叱られないようにやる」「いい成績が取れるからやる」という外発的な動機ではなく、その対象そのものへの関心や知的欲求に導かれるということだからだ。

社会の変化と求められる能力の変化 主体性が求められるようになってきた

なぜ、主体的であることが重要なのか。それは、21世紀の現在において、実際に社会に出てから必要とされる能力の一つだからである。

日本の高度経済成長期に対応する産業社会では、社会に出てから求められる能力は、多くの場合は作業の正確性と効率性だった。したがって、高校までの教育も「知識・技能」を正確に身に付けることが主眼とされてきた。そして現在では知識偏重が指摘される大学入試も、この「知識・技能」が重視される社会に適合的であったといえることができる。

しかし、21世紀の今日では知識基盤社会が到来している。現在の知識基盤社会と呼ばれる社会では、「多様性」「意欲・創造性」「個別性・個性」「能動性」「ネットワーク形成力・交渉力」などが新たに求められるようになってきている(図2)。

これは日本だけではなく世界的な動きであり、OECDがキー・コンピテンシーの概念を発表し、PISA型学力調査のプログラム開発を始めたのは1997年のことだが、その背景として、テクノロジーの急速な発展によって社会の変化が激しくなったため、社会で求められる能力も基礎学力のように1回修得すればそれで終わりとはならなくなったことがある。新しい知識や環境の変化への適応力、他者との相互依存の強まりのなかでの対人関係を調整する力、課題の複雑化のなかでの解決能力などは、生涯にわたって自ら学び続けることで培われる。

これらの能力を育成することを視野に入れて、学力の三要素の「思考力・判断力・表現力」や「主体性・協働性・多様性」が設定され、それを育むものとして「主体的・対話的で深い学び」が位置づけられたのだ。

図2 21世紀に求められる能力

【産業社会で求められる能力】

- 基礎学力 ● 標準性 ● 知識量・知的操作の速度
- 共通尺度で比較可能性 ● 順応性
- 協調性・同質性

【知識基盤社会で求められる能力】

- 生きる力 ● 多様性 ● 意欲・創造性
- 個別性・個性 ● 能動性
- ネットワーク形成力・交渉力

※「多元化する「能力」と日本社会 ―ハイパー・メトロクラー化のなかで」(NTT出版 本田由紀)より作成

【京都市立堀川高校】興味を課題に落とし込み 知識的裏づけのある問いを立てる

では、主体性とはどのように育まれるのか。教員が生徒に対して「主体的になれ」という言葉をいくら呪文のように繰り返しても生徒の「主体性」が身に付くわけではない。生徒が主体性を身に付け、探究活動において「問い」を立てることができるようになるには、それを意図した仕掛けとプロセスが重要なのである。

そのヒントを、探究活動で成功している高校の取り組みのなかから考えてみよう。

京都市立堀川高等学校は探究活動を中心に生徒の学力を飛躍的に伸ばし、「堀川の奇跡」として知られる。

探究活動ではHOP.STEP.JUMPの3段階が設定され、まず第1段階のHOPとして、生徒は1年前期にクラス単位の活動で「探究の『型』を学ぶ」。証拠集めの方法や引用の仕方、他の可能性を捨てること、論文の書き方などとともに、「漠然とした興味を具体的な課題に落とし込む方法」を学ぶことが注目される。

第2段階のSTEPは「探究の『術』を身につける」であり、1年後期から「ゼミ」が開かれ、クラス単位ではなくゼミ単位の活動に移る。ゼミは自然科学、人文科学、社会科学の分野から8〜9のテーマを選択し、グループによる探究活動に取り組む。ここで専門的なより深い知識を身に付けるのである。

そして、第3段階のJUMPにおいて「探究の『道』を知る」として、2年生の前期に全員がゼミを基盤としつつ各生徒が自ら問いを立てて個人研究を行う。そして全員がポスターで発表し、その後論文にまとめる。

総仕上げ段階の2年の探究活動を個人研究にしている理由は、将来の大学や大学院、あるいは社会に出ての研究活動では、個人は大きなプロジェクトの一部のみを担うことになる可能性が大きく、高校時代に全プロセスを一通り自分自身の手で経験しておくことが重要だと考えているからだ。

また、論文→発表という順序ではなく、ポスター発表→議論→論文という通常とは逆の順序にしているのは、ポスターセッションやゼミでの議論を論文に反映させて完成度を高めるためだ。

堀川高校の探究活動のもう一つの大きな特徴は、生徒による探究基礎委員会が組織され、重要な役割を担っている点だ。探究基礎委員会は1年生では1クラスに4人、6クラス合計でおおむね24人で構成されている。

1年生も2年生も各学科ごとの委員長が中心となって、構成される運営班が中心となって、生徒に働きかけるためのプロジェクトなどが自主的に立ち上げられる。

このように生徒が主体的に取り組むためのさまざまな仕掛けが用意されているが、ここでは次の点を強調しておきたい。すなわち、最初に興味を具体的な課題に落とし込むことを学び、次に課題に取り組むために必要な専門的な知識を身に付ける。そうして自ら問いを立てて探究し発表するというプロセスである。このプロセスによって、単なる興味から問いへと、そして問いをよ

り深く掘り下げていく知識へと生徒たちは誘われるのである。

【富士市立高校】繰り返すことで スパイラルに問いと探究を高度化していく

もう一つの例を紹介しよう。静岡県・富士市立高等学校も2011年の開校時から探究活動を基軸に据えた教育を行っている。同校の探究活動は「究タイム」と呼ばれ、毎週2時間のボリュームで「序」「論」「活」「究」「夢」という5段階で、スパイラルに1年前期から3年前期まで高度化していく。

1年前期の「序」では、ブレインストーミング、KJ法などを使って課題を見つけ、情報を集め、まとめて表現するための基本的な方法を学ぶ。この段階では、慣れることが重視されている。

1年後期の「論」ではディベートにチームで取り組むことで、多角的な見方や論理的な考え方を学び、コミュニケーション力や協働力を高めることを目指す。

2年前期の「活」では、地元の富士市の抱えている課題に向き合い、解決策を検討しプレゼンテーションする。ある年のそれは「市役所プラン」と名づけられ、クラスごとに市役所の健康福祉課、環境課、防災危機管理課と提携して、地域課題を見つけ、解決することに取り組んだ。

ポイントはこの「市役所プラン」が3サイクルで取り組まれていることだ(図3)。

最初のサイクルでは各部署の計画などを読み込んで興味のある課題を見つけ、次に富士市の取り組みをウェブサイトや市の計画から情報収集・分析し課題を絞る。そしてこの段階で、調査した情報とグループで設定した課題とを報告・発表する。

2番目のサイクルでは、最初のサイクルで設定した課題を修正し、設定し直すことから始まる。次に、市職員の話や体験学習で情報収集して取り組むべき課題を検討し、中間発表会で報告する。

そして3番目のサイクルで、もう一度課題を修正して設定し直し、さらに独自の調査を計画する。それに基づき自分たちでさまざまな場所に出かけていって話を聞き、解決策の根拠となる情報を収集。最後に探究学習発表会で、これまでの活動で考え出した解決策を提案する。

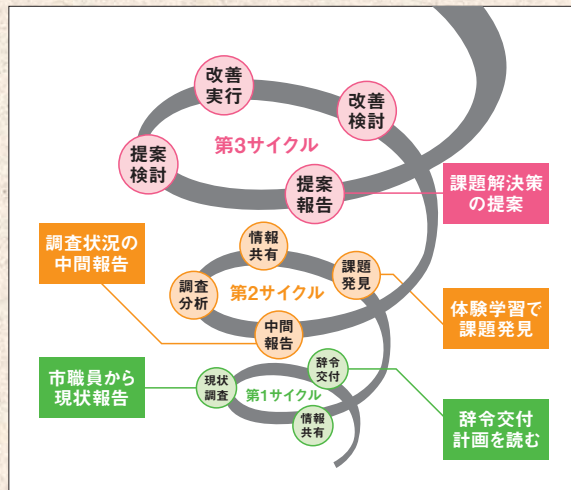
このように3サイクルにすることで、各サイクルの最後に他のグループの発表を聞き、自分たちのグループよりも進んでいたり優れていたりする内容を知ると、生徒たちは自分たちの内容をさらに良いものにしたいと意欲的になるのである。

そしてさらに2年後期の「究」では、これまでに身につけた力を活用して、自分自身が設定したテーマを研究することで社会問題や自分の将来についての視野を広げる。

3年前期の「夢」では、3年間の学習を振り返り、そこでの気づきや自らの成長を自覚し、将来とのつながりを意識したスピーチ原稿の作成を通して進路意識を高め、後輩たちに伝えていくのである。

こうした取り組みが、生徒たちの意識の変化に結びついてい

図3 「市役所プラン」単元の流れ



ることは、アンケート調査からも読み取ることができる。

例えば、学習方法に関することでは「何かわからないことや困ったことがあったときに、どこに問題があるかを考えることができる」が全国平均80.6%に対して同校生徒は88.6%と高い。同様に、「異なる立場や考え方の良いところを見つけることができる」が全国82.5%に対して91.6%である。「自分は地域や社会から必要とされていると思う」が全国49.1%に対して63.7%、「学修や生活での気づきを自らの改善につなげている」が全国69.4%に対して82.3%と、いずれも高い数値を示している。さらに「失敗しても、もう一度挑戦したり、最後までやり遂げたりしようとする」が全国平均77.5%に対して、90.3%となっているのである。

出典：『日本生活科・総合的学習教育学会 学会誌 2015年発行
「総合的な学習で育まれる学力とカリキュラム(2) 中学・高校編」

生徒の内発的動機を引き出し 自ら問いを立てられる主体へ

京都市立堀川高校と富士市立高校の探究活動の事例から読み取れることは多様にあるが、そのなかでも次のことは重要である。生徒が自ら問いを立てるということは、単に自ら関心のあることに自由に取り組みませればよい、ということではない。堀川高校にせよ富士市立高校にせよ、興味を問いに転換させること、問いに取り組むうえでの専門知識の学びなどを組み込んだプロセスを入念に設計することで、生徒自らが問いを立てて探究活動に取り組むことを可能にしているのである。

加えて、両校の取り組みに共通していることは、生徒の内発的動機を引き出している点だ。堀川高校でいえば生徒による探究基礎委員会の活動が、富士市立高校でいえば地域に必要とされている実感がもたらす自己肯定感が、そのことを示しているといえるだろう。

探究活動で壁にぶつかっている高校や先生方にとって、大きなヒントとなるのではないだろうか。